

里山

SATOYAMA
イニシアティブ

自然と共生する持続可能な農山村社会のためのビジョン

SATOYAMAランドスケープ 私たちの文化と自然遺産

従来、里山はクヌギの薪炭林、松林、竹林などの二次林、また、わら、飼い葉、堆肥を得るために管理される草地のことを指します。このような二次的環境は、その環境がもたらす重要な自然資源を長年にわたって、持続可能な形で利用することで維持されてきました。

日本の伝統的ランドスケープには、耕地、果樹園、水田、ため池と水路、集落や農場自体などの他の多様な農山村環境も含まれます。里山とこのような他の環境が組み合わさって形成された複合的な農山村の生態系は、里地里山と呼ばれます。

里地里山では、多様な林地、草地、湿地の環境が複雑に入り交じってモザイク状になっています。このような豊かな組合せは、現在絶滅が危惧されている多種の野生生物の生息地を作りだしており、また防災、流域保護などの重要な生態系サービスの効果を高めています。

日本人は里地里山に深い情緒的愛着を抱いており、そのような景観は日本人のインスピレーション、想像、創造力を深く刺激してきました。里地里山というテーマは俳句、伝統芸能、手工芸品、さらには音楽でも出てきます。また昔話や現在のアニメ映画の舞台としてもよく取り上げられます。

SATOYAMAイニシアティブ は、里地里山などの、人間の生活様式と自然世界が長期にわたって相互作用することで形成された複合的な農山村の生態系を対象としています。このイニシアティブは、生物多様性の保全と持続可能な利用という2つのニーズを調和させる資源管理および土地利用のためのビジョンを作り出すことを目的としています。





里地里山の自然環境

里地里山の自然環境は、農林業に携わる地元の人々がその生活様式の中で作り出し、利用、管理された環境からなります。

二次林

薪炭林などの管理された林地からなる二次林には、主にコナラ(*Quercus serrata*)、クヌギ(*Q. acutissima*)、マツ(*Pinus densiflora*)などの、薪や炭を作るのに適した樹種が生育しています。10~30年ごとに樹木を注意深く伐採することで、林地は広々とした、明るい状態に維持され、スミレ、ユリ、リンドウ、ランなどの多くの野生の草花にとって好的な生育地となっています。



水田

日本では2000年以上にわたって米が主食となりました。水田の風景が季節によって変化していく様子は、日本人にとって深く情緒を掻き立てられるものです。さらに、水田には春から夏にかけて水が張られます。地域によっては、冬に再び水が張られるところもあります。このため、水田は大きな湿地としての役割を果たし、多様な野生生物にとって極めて重要な生息地となっています。



ため池と水路

水稻栽培において、水は欠かすことのできない要素です。冷たい湧水は小さな池に集められ温められてから、複雑に張り巡らされた水路を通じて水田に送られます。このような池や水路も、水生植物や、トンボなどの昆虫の生息地となります。カエルやサンショウウオ、またメダカなどの小さな魚はこのような水域で繁殖します。



牧草地と採草地

二次的草地には、家畜用の牧草地、わら、垣の材料、様々な生活用具を作るために管理されてきたススキやササの草地などが含まれます。草地の管理には毎年の草刈りや野焼きが必要ですが、多様な植物、昆虫、鳥類、小型哺乳類の生息地となります。ススキが一面に茂った秋の草原に日光が射す風景は、里地里山の典型的な景観のひとつです。



SATOYAMAランドスケープの 利用と管理

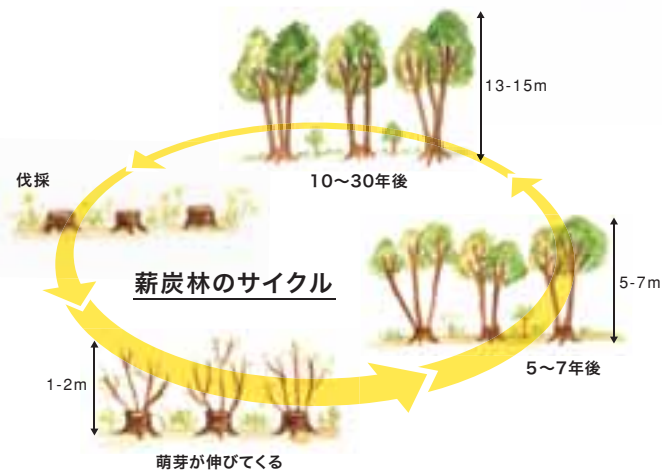
生物多様性保全にとって重要なプロセス



1 キジ 2 アカトンボ 3 田の神

伝統的な薪炭林管理

管理には夏期の下生えの伐採や、冬期の堆肥作りのための落葉の収集などがあります。樹木は10～30年のサイクルで伐採されますが、切株からはすぐに新しい芽が伸びてきます。近年では薪の需要が急激に減少しており、多くの薪炭林が放棄されています。こうなると、林地は鬱蒼とした藪に戻り、それまで存在していた、明るい生息地を必要とする林床の植物などの生物種が失われます。生物多様性の保全には、里地里山を適切に管理することにより、人間の活動と自然界のバランスを保つことが重要です。



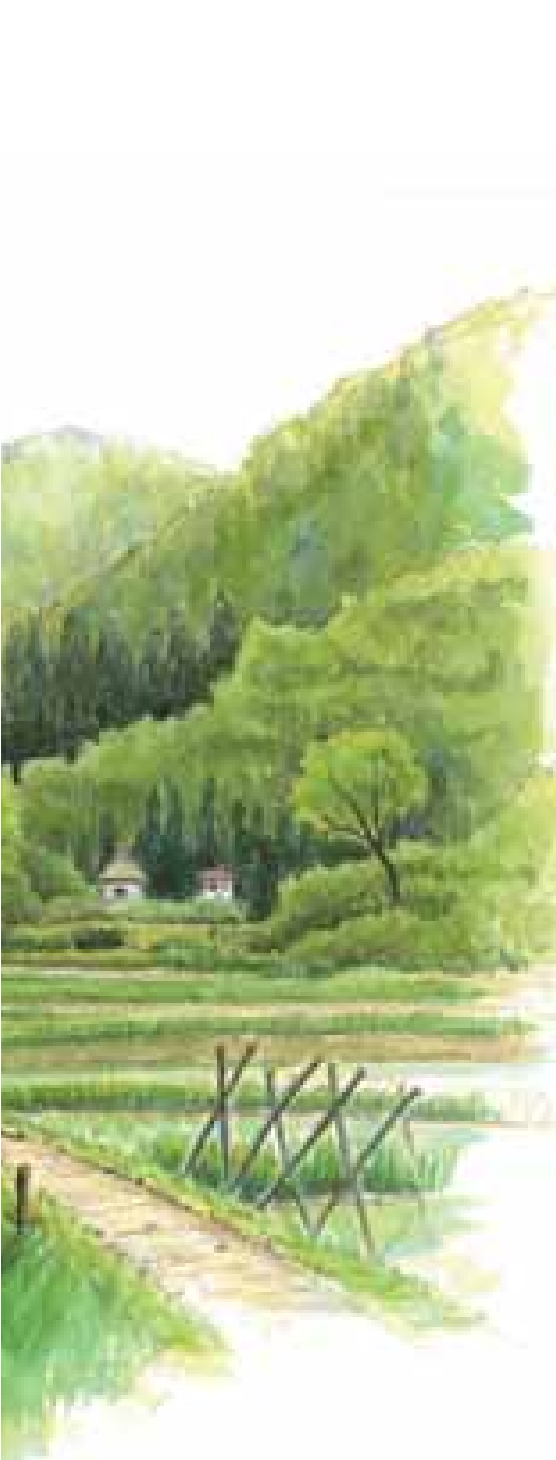
薪炭林のカタクリ



シイタケのほだ木栽培



茶の湯に欠かせない木炭



水田

豊かな湿地生態系

水田は、生態学的には季節的な湿地としての役割を果たし、多様な水生昆虫、甲殻類、魚類、両生類の生息地となります。このような小動物は、水鳥などの捕食動物の重要な食物となります。細い谷間や険しい斜面に作られた小さな水田は、隣接する林地とともに、とりわけ生物多様性に富んでいます。多くの生物種は生存

するために、林地と水辺の生息地の両方を必要とします。しかし、このような小さな水田は、人手不足や生産効率の低さから放棄されることも少なくありません。このようななか、豊かな水田湿地の生態系を維持・修復する必要性に対する認識が徐々に高まりつつあります。

多様な水鳥の採食場所としての水田



1 コハクチョウとオナガガモ 2 ムナグロとキョウジョシギ 3 トノサマガエル 4 コウノトリとアオサギ

里地里山は野生生物の生息地として重要です。多様な動植物が里地里山の環境に適応し、豊かな生物多様性が農業生産と調和して共存できるようになりました。水田は生物多様性の保全において国際的に重要な役割を果たしており、シギ・チドリ類などの渡り鳥にとって、重要な生息地となっています。

SATOYAMAイニシアティブ

自然と共生する持続可能な農山村社会のためのビジョン

SATOYAMAイニシアティブは、現代世界において二次的自然の価値に対する共通認識を高め、CBD/COP10で提案可能な、自然と共生する持続可能な農山村社会のモデルを作り出すことを目的としています。世界中から持続可能な自然資源管理の事例を集めて分析し、体系的データベースの中核を形成します。このような事例に共通する重要な原則を抽出し、幅広い専門知識や経験を活かして、個々の具体的地域に即した持続可能な管理戦略の開発、実施、評価のための運用ガイドラインを作成します。

世界規模で、持続可能な利用・管理のための共有データとモデルを作り出す(CBD/COP10で提案)

ステップ1 世界中から接続可能な自然資源管理の事例を収集・分析する

ステップ2 現状を分析し、二次的自然の保全・管理のための将来の課題を明らかにする

エコアグリカルチャー
アグロフォレストリー
コミュニティフォレストリー

協力

生態系アプローチ
アジスアペバ原則および
ガイドラインなど

ステップ3 原則・ガイドライン・行動計画の作成

- 1 このような事例に共通する重要点である原則を抽出する
- 2 接続可能な管理戦略の計画、実施、評価のための運用ガイドラインを作成する
- 3 優れた実践についての体系的データベースを立ち上げる
- 4 世界規模で拡大する行動計画を確立する

複合的生態系の 枠組みに基づく 土地利用戦略の開発

アジアの農山村のランドスケープの特徴は、多様な森林や湿地の二次的環境が、地域の地形と密接に結びついたモザイク状の空間構造と組み合わせられていることです。このような土地利用形態によって複合的な生態系が生まれ、これが地域の生物多様性を保全し、また地域に暮らす人々に対しては、流域保護、自然災害の防止、病虫害の抑制、食糧・燃料・木材生産などの生態系サービスをもたらしているのです。

しかし、このような利益は複合的生態系だからこそ得られるものであり、伝統的なモザイク状の土地利用が単一栽培などの画一的な土地利用に変わると、失われたり、劣化してしまうものなのです。土地利用戦略では、複合的生態系の重要性を理解した上で、生産と生物多様性および生態系サービスの保全の間でバランスを取るよう努める必要があります。当該地域の生物種についてリストを作成することは、このような努力に向けた最初の一步として役立つでしょう。



1 食糧供給 2 花粉媒介 3 食糧供給 4 木材/燃料の供給 5 水源地の保護

環境容量および自然回復力に見合った持続可能な資源利用

持続可能な資源管理と土地利用戦略は、当該地域の環境容量や自然回復力を考慮に入れた上で、適切な規模でデザインする必要があります。この点を考慮に入れないと、農山村の森林資源や水資源の枯渇、土壌環境の悪化や浸食、生物多様性や生態系サービスの低下につながりかねません。エコアグリカルチャー、アグロフォレストリー、循環的土地利用という概念は、環境指標の確立および監視とともに、土地利用戦略の必須要素です。たとえば、優良事例として、兵庫県における木炭生産のためのクヌギの薪炭林管理が挙げられます。ここでは様々な再生段階にある林地がモザイク状に組み合わさっています。各々の林地の自然環境は少しずつ異なり、多様な生物種にとって豊かな生息地となっています。



兵庫県のクヌギ薪炭林

地域コミュニティをはじめとする多様な利害関係者による意思決定

持続可能な管理戦略の開発、実施、評価は、地域コミュニティを中心とした合意型の意思決定に基づく必要があります。地方自治体、NGO、また都市部の企業や消費者などの生態系サービスのすべての受益者を含む幅広い利害関係者から積極的に意見を求めることも必要です。たとえば、多くのコミュニティフォレストリーの取組みでは、利用、保全、再生、環境教育などをバランスよく実施するために、管理評議会を立ち上げ、利用目的別の土地区分や管理のあり方について協議することが重視されています。



開発と保全のバランス

持続可能な管理戦略では、農山村の貧困と開発の問題を避けて通るわけにはいきません。世界中の貧困者のうち、推定で75%が農山村地域に暮らしていると言われていています。そこでは貧困と二次的自然環境の悪化により、生計を立てるのに必要な生態系サービスが崩壊するという悪循環が生じています。生物多様性の保全は、まずこの循環を止めることなしに実現することはできません。エコツーリズムを推進したり、生物多様性に優しい農山村の作物に価値を生み出せば農山村の発展につながるとかえられます。また、現代の科学技術を伝統的な知識と結び合わせることで、保全と経済的利益を両立させる戦略を立てることが可能となるでしょう。



今後の取り組み

SATOYAMAイニシアティブは、国連大学と環境省の協働作業であり、世界中の政府機関、NGOなどの組織からの積極的な参加を得て行われるものです。その目標は、持続可能な管理実践のためのモデルを作り、共有データベースを立ち上げることにあります。国連大学と環境省はさまざまな利害関係者の意見を参考にしながら、今後の取り組みを進めていきます。



SATOYAMAイニシアティブ国際ワークショップ(平成21年3月、東京)

伝統的農山村文化を育む SATOYAMAランドスケープ

SATOYAMAランドスケープがもたらしてきた生態系サービスは、何世紀にもわたって、地域に根付いた豊かな舞台芸能や芸術文化の伝統を支えてきました。人々は、一年を通じて行われる様々な祭や儀式の中で、豊かな水、良好な気候、豊穡な実りを願って祈り、感謝の念を捧げてきました。このような、日本人の心に深く刻まれている一年を通じた生活様式のリズムは、都市部では失われつつありますが、農山村地域では今でも目にすることができます。



山口県下関市のお田植祭



埼玉県鶴ヶ島市の脚折の雨乞い行事

新潟県長岡市山古志の里地里山

SATOYAMAイニシアティブ

自然と共生する持続可能な農山村社会のためのビジョン

2009年3月発行

制作：環境省自然環境局
〒100-8975 東京都千代田区霞が関1-2-2 TEL:03-3581-3351(代表)

編集：自然環境研究センター
株式会社イースタンクリエイト
株式会社マックユーエン・プロ

デザイン：長島デザイン事務所



環境省

©環境省自然環境局 2009

